

人文学部教授

上野 誠治



ことばに関する人類の興味・関心は古く、それは主として聖典や古典文学などに使用されていることばを正確に読み取ることばで、大いなる存在と一体化し、その奥深い原意を汲み取る必要からであった。大意が分かればよいでは済まされなかつたのである。その後、経験科学としての言語学(linguistics)が登場するが、その歴史は意外と浅く、19

世紀の比較言語学や20世紀の現代言語学の誕生に起源を持つている。その言語学は「人間言語を対象とする科学的研究。実用を目的とする語学とは異なり、言語そのものの解明を目的とする」(『日本大百科全書』小学館)ものであるが、研究対象であることばは、日常われわれが無意識に、当たり前のようにコミュニケーションの道具として使っているために、一般的には「科学」の対象と認識されていないかもしれない。しかし、当たり前前のことがらを問題にし、それ的確な答を与えるものこそ「科学」であるから、言語学も「科学」となり得る資格は十分あるのである。ただ、現状では、言語学がいわゆる語学とはまったく異なる学問的営みであることさえあまり知られてはお

らず、むしろ混同されることの方が多くかもしれない。「実用を目的とする語学」は、ある特定の言語(すなわち英語や日本語など)の読み書きができるようにするためのスキルであり、本来、言語学とは一線を画するものである。(本学の出前講義のプログラムにおいても、言語学は語学分野に分類されている。)言語学は研究対象とする言語によって下位分類される。たとえば英語という特定の言語の言語現象を記述したり、その背後にある原理や規則性の解明を目指す場合の学問領域を英語学(English linguistics)と呼ぶ

ことばの窓を通して人間を知る

が、これも英語のスキルを学ぶ語学と混同されやすい呼称である。そういった混同を回避するために、最近では、直訳調の「英語言語学」を使う研究者もいるほどである。

個別言語の研究をさらに一歩進めて、ヒトという種に固有の言語を持つ普遍的特徴の解明を目指す研究プロジェクトもある。われわれは母語をほとんど苦労することなく身につけている

が、母語に関する言語知識は一体どのようにして獲得されたのか。その問いに対するひとつのアプローチが生成文法(Generative Grammar)あるいは生成言語学である。それによれば、赤ん坊が誕生するとき、その脳にはすでに生得的なことばの基本的な仕組み(普遍文法 universal grammar: UG)が備わっている

とされる。普遍文法は、その後の言語経験との相互作用によって、数年という短期間のうちに、英語や日本語などの個別文法へと発達する、という仮説である。このアプローチは抽象度の極めて高い言語理論であるが、人間が脳の中に持つ言語知識の解明を通して、言語獲得に関するいわゆる「プラトンの問題(Plato's problem)」に一定の答えを与えようとするものである。

言語知識は脳の中に収められているので、直接目で確かめることは難しい。そこで、発せられたことばの研究を通して、脳の中の言語知識に迫ろうとするのである。言語はヒトに固有の認知の一部であるから、言語の解明は人間を知り、究極的には己を知るための有益な窓となると言ってもよいだろう。